九州看護福祉大学紀要
Vol，12，№1，103-113（平成22年度）
ISSN 1344-7505

[原著論文]

若い成人期の「キレる」衝動抑制に関する基礎的研究
―アタッチメント概念による半構造化面接を用いた質的探索―

松尾　美佐子[1]　　熱田　一信[2]

【要　旨】　本研究は「キレる」衝動の抑制について、アタッチメント概念により質的な探索を試みた。その際、１２名の自主志願した若い成人期にある人たちを研究協力者とすることによって、方略尺度の文面的妥当性を確保し、記憶表象の呼び出しにも安定性があると考え、久木山らの開発した方略尺度、貯蔵された内的作業モデルの一つの指標と仮定したエゴグラム、幼少期の両親との記憶表象の呼び出しによる半構造化面接調査をそれぞれに実施した。その結果、7名は「キレる」現象の予防策として、認知、回避、相談、擬似の4方略を複合的に使用し、比較的方略を上手く使える対象者は、自由でとらわれない子どもらしさ、面倒見がよい保護的親像、協調性のある順応的な子ども像が高く、硬く権威的、批判的な親像は低く、現実的な大人像が中間的なN型亜系のエゴグラム・パターンを示す傾向があった。また、幼少期に両親からアタッチメントの原点でもある「主観的な安心感」が得にくい場合は相談方略を使う傾向がみられた。幼少期の記憶表象を呼び出す半構造化面接では、両親との間で幅広い情動のやり取りを経験したものは、会話公準もしっかりし生き生きとしていた。さらに、経験、体験評価も自然であり、アタッチメント・パターンとしても自律的な傾向を示し、ホメオスタティック・アタッチメント・パターンが維持されていることが認められた。平穏に過ごしてきたが、幅広い情動のやり取りに乏しい対象者の場合、情動の喚起が破壊的である状況の中で、他者の助けを借りて均衡を取り戻すよりも、擬似的発散方略をとる傾向がみられたが、昇華的な性質を機能させることによって、「キレる」現象の予防にもつながるのではないかと考えられた。本調査で使用した半構造化面接調査法はMain&Goldwynが開発した技法と分析法の骨組のみを取り入れた調査技法であり、原法とは異なるものではあったが、この方法は単なる調査法、研究法にとどまらず、今後、臨床的援助技法や臨床的アセスメント法としても意味を持つと考えられた。

キーワード：「キレる」、アタッチメント概念、内的作業モデル（IWM）、半構造化面接

【問題と目的】

カタカナまじりの「キレる」という文字表現をよく見かけるようになって10年余りが経過する。この文字表現は本来、「鋭利、切れた状態、切ることが可能」を意味する[1)]が、今日では対人関係が突然断絶する人の衝動的な行為を意味し、その行為は幅広い年齢層に見られる現象でもあるため「キレる」との表現が一般的になっている。久木山らは、「キレる」を衝動行為の一つと捉え、その行動化の制御という観点から「キレ衝動抑制方略尺度」を開発し、中学生に実施した。その結果、行動化の制御に関係する方略として「認知的方略」「回避的方略」「相談的方略」「擬似的発散方略」の4方略を見出し、その中で，「認知的方略」が、衝動行為の抑制にとって重要であるとの結論づけている[2)]。常識的に考えてこの４種の方略が様々な対人場面でバランスよく機能するのは、防衛（適応）機制という視点から見れば極めて当たり前であって、臨床的な立場からは、特に目新しい方略ではない。問題はこれらの方略が如何に形成され、それを特定の場の中で如何に適切に機能させ精神的健康を保持するかである。また、「キレる」要因の一つとして個人の性格や特性に言及している研究も見受けられる[3) 4)]。しかしながら、そこで明らかになった心理的諸事実は精神保健上の援助においていかなる意味を持つのであろうか。そういう素朴な問いかけがまず、本研究着手の動機である。

従来、「キレる」衝動行為に関する研究は、その多くが、精神分析的概念からの親子関係、生

[1]　九州看護福祉大学　看護学科　　[2] 九州看護福祉大学　社会福祉学科

育・発達過程の歪みや軋轢の問題として語り継がれ、論じられてきた。確かに、個体の原体験は、その個体の人生早期の「個体×環境」に原因帰属する事実であり、その意味では個々の家庭における主として親との永続的関係を基盤にしたものと関連するものである。当然、本研究で取り上げる「キレる」現象も、中学生などの思春期の問題行動として焦点化され、話題となったこともあり、彼等の幼少期における生育環境での親との関係、育て方について言及した研究が多い[5) 6)]。

そのような中で、特に精神分析的な病理的説明概念の限界に言及し、重要な他者との間での体験の経験と貯蔵された内的ファイルの評価に着目し、論を展開したのがBowlby[7)] である。彼は哺乳類の人生早期の発達過程の重要な他者との間に展開される生得的絆を「付着」(アタッチメント)と定義し、その日々の交流のプロセスの中で形成される内的ワーキングモデル（以下IWMと略記する）が安定して機能し、人生過程での様々な経験的事実、体験的な事実を健全に評価し、恒常的な態度や構えを保てることが、その後の他者との対人関係にも安定をもたらすと論じてきた。このことはIWMの蓄積の結果であるアタッチメントにはパターンがあり、そのパターンが生涯を通じて存続し続けて機能していくことを意味し、「キレそうになった時」の行動化の予防にも決して無関係でないことと考えられる。換言すれば、「個体×環境」の相互作用の蓄積が、その個人の特定の時点において、個人がそれまで貯蔵してきた情報と現行の情報の双方をデーターとする自己と他者の間の一種の作業表象とも言えるIWMの働き[8)]如何によって、その特定時点での自我の機能の様態が反応行動という形式で現出することを意味する。そこで筆者らは特定の時点でのIWMを比較的妥当な形で可視的に表現する既存の標準化された質問紙チェックリストとして想定したのが「両親像、現在の自我像、子ども像」という3つの成分で構成されたエゴグラムであり、それへの反応は個人が貯蔵してきた作業表象情報の一つでもあると考え、本研究でエゴグラムの使用を選択した。換言すれば、「キレそうになった時」にとる方略の上手・下手の問題は、両親像・大人像（現実像）・子供像の自我機能の構えとどう関係するかに関し、総括的に把握し、解釈の根拠の一部とする目的で予め把握してみた。その結果、「キレそうになったときの対処が旨い」と考えられるのは批判的な親像よりも保護的な親像と共に、同時に順応的な子ども像が高い傾向を持ちながらも、大人像が平均以上に維持される傾向があるが、キレ方略の使用が稚拙な場合では、低位な大人像と同時に、批判的な親像、比較的強い義務感、柔軟性に乏しい傾向がある等の結果を得た[9)]。

人はその生育過程や人生過程で衝動や感情の完全支配や統御は不可能な存在（「キレなかった経験はない」）だが、社会生活や社会的適応上大きな問題にならずに今日を迎えているのが現実であるとの素朴な観点に立った場合、「キレる」現象の制御が、現在まで培ってきた内的作業モデルにはどのように表現され、重要な他者との関係を評価しているかについて探索することとした。その場合、本研究では人生早期の作業表象の呼び出しが比較的容易である若い成人期を対象として、探索的調査を試みることにした。

近来、アタッチメント概念は成人期のみならず、高齢期までの生涯過程を包含した概念として理論展開されてきている[10) 11)]。その中で、今後臨床的方法としても価値を持つ方法として、Main&Goldwyn[12)] が1986年に開発したアダルト・アタッチメント・インタヴュー(AAI)がある。この方法－技法とも言い換えてよいが－は、個人が頭の中で想起した養育者に対する表象的接近のありかたを問題にする手法（アタッチメント研究者間では「無意識を驚かす」技法と言われている）であり、通常は意識化し得ないようなアタッチメントに関する情報処理過程での個人的特性を抽出し、個人のアタッチメント・システムの活性化を促すように工夫されているものである。しかし、この技法は開発者の訓練に基づくライセンスを持つ者のみが実施できるものであり、また、構造化の中身にはいくつかのプローブがあるものである。そこで本研究では大西[13)]、数井・田中[14)]、佐々木・瀬地山[15)]、坂上[16)]、及び遠藤[17)]などのライセンス保持者の研究を検討し、更に言語学的用語分析法[18)]を検討したところ、筆者の一人が専門とするロールシャッハ・メソッド（修正クロッパー法）[19)]の試行、解析法との近似性（質疑

段階での半構造化面接法、反応の明細化、統合性、体験型、形態水準の評定）があるとの結論に至った。そこで、本研究の手法はAAI構造枠に準拠しながら細部を修正した方法により作業記憶表象を促す半構造化面接法であると位置づけた。また、同時に、成人アタッチメント研究法の中で、AAI技法に関し概念図（図１）を作成し、本方法の持つ意味と特性を確認した[脚注1)]。

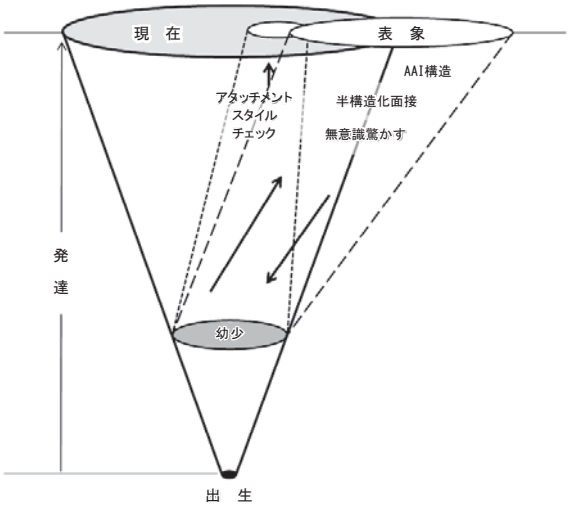

図1.成人アタッチメント研究法の概念図
W.S.ロールズ＋J.A.シンプソン 遠藤・谷口他監修（2008）
『成人のアタッチメント理論・研究・臨床』北大路書房
を参考に作図（熱田・松尾・山代）

【方法】

１.調査対象：某県の大学生で、12名(男性5名，女性7名）、平均年齢24.4歳であった。

２.調査期間と面接調査時間：調査は平成2009年6月1日から約1ヶ月間、一人の面接時間は90分を要した。

３.調査方法：1)研究に関心のある人間科学系学部4年生に口頭で研究協力を依頼、快諾を受けた自主参加者であった、面接は個人情報に抵触する内容を含むため、口頭による説明と同意に加え、文面承諾法とした。2)面接に先立ち「キレ」衝動抑制方略尺度[20)]、エゴグラム・チェックリスト[21)]の試行後、半構造化面接調査を実施した。3）半構造化面接調査の実施は我が国で、AAIライセンス資格を持つ研究者の技法紹介論文[22)]を精査し、共通した15項目のインタヴュー・ガイドを導入したが、記憶表象へのアクセスと表象の語りに必要なキーワードに関しては、我が国文化の特徴及び研究協力者の性質を考慮し、詫摩・戸田が行ったアタッチメント・スタイルに関する研究[23)]結果から選択し、カード化した（32個の形容詞）を準備し使用することによってAAI技法を修正して行った。4）半構造化面接調査は全て、電子音声記録媒体（ＩＣレコーダー）に記録するとともに、面接調査での非言語行動に関しても記録するようにした。

４.分析方法：1)構造化されたキレ方略及びエゴグラムに関しては、総括的に把握した結果を基に研究対象の位置付けを行う。2）面接調査は電子音声記録媒体と面接過程における記録を基礎に、トランスクリプトを作成し、AAIの分析手続き－過去のアタッチメント経験(5項目)、現在の心理状態(10項目）、会話の公準(4分類）－に従い、本論文の主筆者による単独の解析後、同資料による分析結果について共同研究者との討議、スーパーヴィジョンによる結果とした。3)正規のAAI分析では全ての面接評価は9段階評定になっている。しかし、本研究では、ロールシャッハ・メソッド（修正クロッパー法）形態水準評定において使用される5段階評定法（++、+、±、∓、－）を使用した。4)AAIの最終分析の結果は、安定・自律型（F型）、愛着軽視型（Ds型）、とらわれ型（E型）、未解決型（U型）に類型化され集約された形式で考察される。本研究では半構造化面接調査の各類型とエゴグラム及びキレ方略との関連について言及することになるが、その際、測定水準、もしくは測定層を考慮した質的探索を実施した。

５.倫理的配慮：研究計画・研究方法・研究協力者の選定基準・データーの取り扱いなどの詳細に関しては、筆者らの所属する大学の研究倫理審査委員会の許諾を得て調査に着手した。

脚注1）IWMの研究法には2つの流れがあり、1つはMain＆Goldwyn(1986)によるインタビューによるIWMの測定を基礎とする発達・臨床領域研究、もう1つはHazan＆Shavar(1987)等による質問紙によるIWMの測定による社会・人格研究である。図１は筆者らが、成人のアタッチメント研究法の２つの研究法に関して概念化したものである。今回の研究法は発達・臨床領域研究法としてインタビューによる記憶表象の取り出しによるIWMの測定を活用した。

【結果】

1.「キレる」方略とエゴグラムに関して

表1は12名の結果を、主筆者が予備的に行った学園祭イベント会場の一般参加者（297名）の方略結果と比較したものである。

表1.「キレる」衝動抑制における本研究と予備調査との比較

	合計	認知	回避	相談	疑似
本研究	85.9	28.3	32.1	17.7	7.8
予備調査	85.8	29.8	31.3	17.6	7.2

本研究 n＝12,予備調査 n＝297

この結果を見る限り本研究での方略の在り方に特殊な傾向は見当たらない。また、図２は本研究12名のエゴグラムによる両親像、大人像、子供像の自我機能配分の平均像を示し、その特徴は我が国で多い混合型の中のN型のパターンを示す[24]が、その勾配は緩やか、つまり大人像が維持されている傾向を持ち、図中Fに示される妥当性も保持されている結果である。

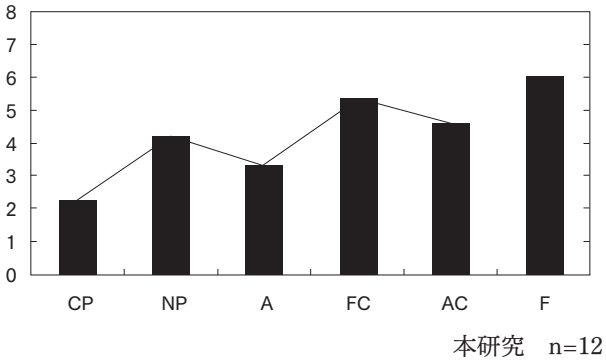

図2. 12名の自我機能パターン

表2は主筆者が予備的に行った「キレそうになった時」の方略の巧拙結果を軸にした場合、本研究での12名の研究協力者の傾向を把握するためのものである。

それによると12名中7名が複合的な方略を使用し、また、回避的方略および相談的方略が使用されやすい傾向にあること、また、4名は擬似的発散方略という、何らかの些細なキレ体験を経験する傾向が存在している。

表2. 方略得点の巧・拙分類

項目	認知的方略		回避的方略		相談方略		擬似的発散方略		合計	
氏名	巧	拙	巧	拙	巧	拙	巧	拙	巧	拙
A						●				1
B										
C		●	○			●			1	2
D	○								1	
E					○			●	1	1
F	○		○		○			●	3	1
G		●		●				●		3
H			○						1	
I			○			●			I	1
J			○					●	1	1
K					○				1	
L		●		●	○		○		2	2

○:巧群に属する得点
●:拙群に属する得点

2．半構造化面接に関して

1）両親像の表象

AAIという方法は、過去の重要な他者（一般的には父母）との関係の中で蓄積体験した記憶を表象として現在の測定空間に呼び覚まし、調査者に語るという言語的に伝達表現する技法である。したがって、まず、被調査者の中に気づくことなく眠っている、「無意識を驚かす」ことにある。本研究では12名被調査者の内11名が幼少期に、1名が学童期前半にアクセスし、また、表3はアクセス時のそれぞれの両親像表象に対する形容詞選択結果を得た。

表3. 形容詞選択の結果一覧

	選択した形容詞	父	母	合計
ポジティブ	優しい	9	6	15
	人の良い	7	4	11
	尊敬できる	7	2	9
	頼りになる	5	3	8
	信頼できる	5	3	8
	理解のある	4	3	7
	暖かい	3	4	7
	受け入れてくれる	2	4	6
	安心できる	1	5	6
	思いやりのある	4	1	5
	感受性豊かな	0	4	4
	一貫した	2	1	3
	正しい	1	1	2
	落ち着いた	2	0	2
	愛すべき	0	1	1
	安全な	0	1	1
	丁寧な	0	1	1
	知的な	0	1	1
ネガティブ	うるさい	2	5	7
	押しつけがましい	2	4	6
	拒否的な	0	2	2
	無責任な	2	0	2
	無関心な	1	0	1
	批判的な	0	1	1
	矛盾した	0	1	1
	冷淡な	1	0	1

この結果を一瞥して、父母間での違いや個人差はあり、また、「うるさい」「押しつけがましい」とのネガティヴ語の選択も散見されるが、かなりのものが父母像を肯定的に評価している。

2）面接結果

AAI技法では被調査者が浮かび上がらせた表象に対する形容詞（父母それぞれについて5個）それぞれに選択のいきさつや理由の語りに調査者は傾聴し、浮かび上がった眼前の表象を指定されたインタヴューガイドを挿入させながら、可能な限り非構造的な面接調査を展開していくことになる。そこで得られたトランスクリプトは、過去のアタッチメント経験、現在の心理状態、会話の公準という3つの分析軸で評価されることになる。

（1）過去のアタッチメント経験

表4は父母像それぞれに対する「過去のアタッチメント体験」、一般的な表現をするならば、「語りの内容」の結果である。内容的には「愛情に満たされない」ものが僅か見られ、「達成に対する圧力」に関して母親像の圧力傾向がやや多い傾向であると判断できる。

（2）現在の心理状態

表5は父母像それぞれに対する「現在の心的状態」の結果であるが、この分析の場合、分析の焦点は「語りの内容」ではなく「語りの方法」に着目して分析することになっている。結果の表からは一部に過去のアタッチメント状況が現在に引きずっていること、また、アタッチメントエピソードへのアクセスに多少の困難さがある場合があり、それが語りの表現の乏しさとなっていることが散見されている。また、過去において何らかの喪失体験がある場合、アクセスの困難さやメタ認知の形成にやや不十分さがあるといった傾向も認められた。

（3）会話の公準[脚注2)]

他者へ言語的に伝達する場合、語用論上では公準があり、その違反を評価する必要があるという

表4. 父母に関するインタヴュー結果（語りの内容）

	評定項目	父親					母親				
		−	∓	±	＋	＋＋	−	∓	±	＋	＋＋
語りの内容	1. 親から愛情のこもった行動を経験した程度	2	2	3	5		3	2	2	5	
	2. 親が子どもの愛情を拒絶・回避した程度	7		4	1		6		4	1	1
	3. 親自身の物理的・心理的な世話に子どもを巻き込む程度	10			2		9		1	2	
	4. 勉強や手伝いを達成するように圧力をかけられる程度	4		5	2	1	1		6	4	1
	5. 親が物理的・心理的に近接可能な程度	10			2		9		1	2	

表5. 父母に関するインタヴュー結果（語りの方法）

	評定項目	父親					母親				
		−	∓	±	＋	＋＋	−	∓	±	＋	＋＋
語りの方法	6. 親への観点が意味的レベルと具体的レベルで矛盾する程度	8		2	1	1	10			1	1
	7. 現在怒りに巻き込まれている程度	10			2		9		1	2	
	8. 愛着関係を冷淡にみなしたり軽視する程度	9		2			11			1	
	9. 幼少期について想起できない程度	4		2	5	1	8			3	
	10. 面接中に思考・想起の過程をモニターして報告する程度	3		3	6		1		3	8	
	11. あいまいさや奇妙な表現、文の未完成、主語の混同	8		1	2	1	9		1	1	1
	12. 我が子を失うのではないかという根拠のない不安	8		1	3		9		1	2	
	13. 愛着対象の表の作業の程度	7		1	4		9		1	2	
	14. 外傷体験が未整理である程度	12					12				
	15. 思考の内的一貫性の程度	1	1	10			1		11		

表6. 父母に関するインタヴュー結果（会話公準）

	評定項目	父親					母親				
		−	∓	±	＋	＋＋	−	∓	±	＋	＋＋
会話公準	話に矛盾がなく信じられるかどうか		4	8				1	11		
	情報が十分でしかも多すぎることはないか	1	3	8			1	2	9		
	問われた質問に適切に応えているか	1	3	8			1	2	9		
	話は不自然に崩れていないか、予め用意されたようなものやごまかしはないか	1	2	9			1	1	10		

脚注 2)AAI では会話の公準、語りの方法を分析評価の対象としているところに、この技法の独自性と難しさがあると筆者らは考えている。会話における公準や語りの方法は、公準の崩れ、語りの方法の障害を専門とする精神医学、精神科看護、心理臨床学での臨床経験及び傾聴能力と密接に関係するとともに認知、思考など思考と言語への造詣の深さが関係してくるものと筆者らは実感している。我が国では、半構造化面接の定義が曖昧であると同時に言語病理や語用論が無視とまでは言えないまでも、軽視される傾向にあることをこの段階で指摘しておきたい。

のがGriceの「会話の公準」[25]である。AAIでは、語りをこの公準と照合する分析が必要である。表６は会話の公準の結果である。公準遵守が難しいと判断されたものが１名存在し、また、公準維持の困難さは父親に対してその傾向が散見され、その場合「語りの内容」の乏しさ、「語りの方法」の不安定傾向と関連していると考えられた。

３.アタッチメント・スタイルの類型

AAIでの最終結果は、アタッチメント・スタイルとして総合的に4つの類型の中に位置付けられる。その結果、本研究では、F型－安定・自律型－に属する者は父親の67%(8名)、母親の84%(10名)、Ds型－愛着軽視型－に属するものは父親の25%(3名)、母親の8%(1名）、E型－とらわれ型－に属する者は両親共に8%(1名)という結果であり、U型－未解決型－に属する者は見られなかった。

更に、アタッチメント・スタイルと「語りの内容」、「語りの方法」、「会話の公準」の違反や矛盾との傾向に関しても分析してみたところ、父親に対しDs型3名、母親に対し1名見られ、その内両親がDs型の者、両親がE型の者が各1名で、他のDs型は父親の死別あるいは生別の者であり、両者とも母親に関してはＦ型の結果を得た。

【考察】

「キレそうになった時」の行動化の予防が、現在まで培ってきた IWM にどのように表現され、アタッチメント・スタイルに現われるかについて考察する。

１．キレ方略と貯蔵された内的作業モデル（IWM）について

本研究では、IWM が比較的妥当な形で可視的に表現され、個人が貯蔵してきた作業表象情報のひとつであると考え、エゴグラムを使用した。

結果は、特定の自我にエネルギーが集中する傾向というよりも、混合型、つまり各自我機能が相互に影響を与え合う「連動」した自我が機能し、各自我状態の独立した働きは抑えられ、その特徴が複合して表れる対人交流上の基本的構えの傾向にあった。

現実認識にはやや甘さがあり、物事のけじめや厳しさが少ない傾向と優しさや協調性を持った比較的世話好きな対人態度を持つ者が多く、このことは、母親からのファイルを受け継いだ自我状態を示すことと関連していることが考えられる。松尾の調査[26]でも混合型が 65.6% を占め、中でもN 型が半数近くを占め本研究の対象と同様の傾向であった。つまり「キレる」というのは感情統御の失敗の結果を意味するが、エゴグラムには心理的なやわらかさや保護性及び現実的な大人性と適応的な子供性のバランスが保たれていること、また親や家庭の中での多様な経験の蓄積が必要であることを間接的に物語っている。

数井らによると、Bowlby は個体が状態や環境条件の変化などに応じて体温や血圧などを適正な一定範囲内に保持・調整する生理的システムと同様、特定対象との接近関係をホメオスタティックにコントロールしている[27]のだというように、結局、アタッチメント概念の IWM というのは、ホメオスタティックな心的バランスの形成であると考えられる。

２．半構造化面接による記憶表象について

内在化された IWM を探るにあたり、研究協力者 12 名に AAI を修正した半構造化面接を実施した結果、全員が学童前期の幼少期に、愛着対象との相互作用の経験が抽象化され内在化され、円滑なアタッチメントを示すものが大半であった。しかし、一部では円滑とまでは言えないものも僅かにみられた。「語りの内容」においてアクセスが乏しかったものは、勉強や手伝いへの圧力がかかりすぎたり、子どもの愛情を拒絶したり、愛情のこもった行動の経験が薄かったり等に関する評価項目の評定において低い傾向があった。

アタッチメントは生得的なもので“主観的な安心感”[28]を得るために多くの手段を求めて安全基地を探していくものである。例えば、両親が健在だが、母親との円滑なアタッチメント形成に課題がある場合、父親が相補的な意味で安全基地としての大きな役割を担うなど、IWM のファイルは重層的に形成されてくることが予測される。坂上は Bowlby 以降の研究におけるアタッチメントの考え方について“アタッチメント関係は養育者と子どもとの情動制御の歴史の中から作られ、アタッチメントに関する IWM は、個人がどのよう

なやり方で自身の情動を制御するか、あるいは環境との関わりを制御する際に情動をどのように用いるかに影響する”[29]と言及している。更に、坂上は“Sroufe(1996) がアタッチメントの歴史について、養育者との間で幅広い情動のやりとりを経験し、養育者によって自身の情動が効果的に制御されることを経験している”[30]と詳述している。このことは、アタッチメントを行動制御システムであるとする島の考察[31]と重複する。その結果として情動を自由に表出すること、情動の喚起は破壊的ではないこと、たとえ情動の喚起が破壊的であったとしても、他者の助けを借りてすぐに均衡が取り戻されることを学んでいる。したがって「キレそうになった時」の抑制の対応の仕方にもIWM のファイルの多様性・多重性が関係する。「キレそうになった時」の抑制は、その場面の持つ不安・葛藤の状況の中で、当面する欲求不満状況で自分を守ろうとして半ば自動的に―無意識に―とる適応の仕方としての防衛機制と関連する。人間は生得的に安定・安心を求める動物であり、時に応じて瞬間瞬間において無意識に心理的平衡を目的とした行動をするものであり、「キレそうになった時」複数の方略の使用が中心になったものと考えられる。

両親が健在でも、〝主観的な安心感〟を求めるにあたって、両親のどちらも安全基地にならないような研究協力者 K の場合は相談方略を使っている。父親を喪失している場合は家庭の状況は全く違っている。父親不在の家庭は一般的に、権威像に欠け、家庭の秩序もなく、全般的な安全の欠如、危機に対する不安があり、母は近所や友人に安全を求め、また安心を求めるので交際が広くなる傾向があると言われている。そのことは子どもに対しては多くのアタッチメント対象を広げることに繋がる。また、母は子どもに感情的に依存・愛情の対象にし、過剰保護し子どもにも母への依存性を高め、巻き込みを生じさせることにも繋がる。このように父親不在の家庭におけるアタッチメント形成は両親揃った家庭のアタッチメント形成とは〝主観的な安心感〟を得るための安全基地の探し方が異なると言える。勿論、家庭の背景によって異なる。父親不在により生じ易い権威像に欠け、家庭の秩序がなく、全般的な安全の欠如、危機に対する不安を母親が父親の代役をして補おうとする場合もある。その場合母親は母親であると同時に父親でもあることが予測される。アタッチメントの範囲は広がっていることが予測され、安全基地としての役割は家族以外の他者に求める可能性が高くなる。その結果、「キレる」衝動抑制方略においては相談方略あるいは回避的方略を使って、キレそうになった時のコントロールを行っている。

養育者との間で幅広い情動のやり取りを経験した研究協力者 F の場合は、養育者によって自身の情動が効果的に制御されることを経験している。語りの途中経過においては、母親との幅広いやり取りではそれを圧力と捉え、効果的制御とは気づいていない。しかし、語りの内容及び語りの方法という構造を持つ語りを通して次第に自身の情動が、養育者によって効果的に制御されていたことに語りの過程の中で気づいていった。このことが「キレそうになった時」認知・回避・相談の抑制方略を巧く使い、擬似的発散方略にも効果的な対処行動を可能にしていると考えられる。一方、養育者と安定したアタッチメント関係を有していても、逆に養育者との間で幅広い情動のやり取りがなく平穏に過ごした研究協力者 G の場合は、情動を自由に表出すること、情動の喚起は破壊的ではないこと、たとえ情動の喚起が破壊的であったとしても、他者の助けを借りてすぐに均衡が取り戻されることを学ぶ必要がなく、またその機会にも出会っていないと考えられ、「キレそうになった時」は、擬似的発散方略を中心に使用し、「キレる」傾向への防御にやや課題があることが考えられる。Sroufe(1996) の言うアタッチメントの歴史において、養育者との間で幅広い情動のやりとりを経験し、養育者によって自身の情動が効果的に制御されること[32]が情動の自己調整可能な IWM の形成に必須であり、このことが「キレそうになった時」の抑制、ひいては対人関係の在り方に大きく影響することが考えられる。

3．アタッチメント・スタイルについて

当研究の結果は、母親についてF型 - 安定・自律型 - に属するものが 10 名、Ds 型 - 愛着軽視型 -、E型 - とらわれ型 - に属するものがそれぞれ各

1 名、父親については、F 型 - 安定・自律型 - に属するものが 8 名、Ds 型 - 愛着軽視型 - に属するものが 3 名、E 型 - とらわれ型 -1 名という結果であった。佐々木らの報告によると、“日本の母親に AAI を実施した結果 (2000) は、F 型 66%、Ds 型 20%、E 型 6%、U 型 8% と報告していて、van IJzendoorn の報告 (1996) において社会階層の低い群は F 型が少なく、E 型や U 型が多いという報告がされていることから、F 型が多かったことは、知的水準や社会階層が高いことが関与しているかもしれない”[33] と言われている。佐々木らの報告と同様に安定・自律型が多い結果となっていることは、調査対象は少ないが知的水準や社会階層に関しては平均的な水準以上であるとみなすことができた[34]。父親に関しても知的水準や社会階層に関しては平均的な水準以上であるとみなすことができる。E 型 - とらわれ型 - が少ないことに関して、佐々木らによると、“日本人は親へのとらわれによって生じる怒りが表出されにくいと言われる。また、欧米人は独立的な自己理解をして自分の気持ちを非言語的な行動で率直に表現するが日本人は相互依存的な自己理解をする。更に自己の反応などの内的属性より他者の態度に注意を向けやすいために、怒りなどの感情表出が抑制されやすく、日本の面接協力者は面接者を強く意識して、内的な怒りをそのまま表出することが少ない”[35] と言われている。数井らによる AAI の評定基準は 9 段階評定をおこなっている[36]。本研究の評定基準は 5 段階であり、同等の比較はできないが、調査対象者が社会的に安定していることを確認する一指標となった。

F 型 - 安定・自律型 - の場合、数井・遠藤によると、話し合いが過熱しても、現在の親との関係を保とうと努力しながら、生産的な問題解決を目指そうとすると述べている[37]。また、金政によると、感情表出や適切なストレスの処理が可能であり[38]、尾崎・杉本は、安定型は、事態の中で怒りの生起が低いと述べている[39]。

両親が E 型 - とらわれ型 - の場合、数井・遠藤によると、アタッチメントに潜在的に関わるさまざまなことに多くの時間、多大な注意を向け、それに感情的かつ行動的に巻き込まれてしまい強く反応する傾向があり、親への依存状態から抜け出せず、自律性や自己信頼感の獲得に困難をきたすとされる[40]。友人関係においても防衛的であり、人に心底、信頼や期待を寄せることがあまりできないため、人とのコミュニケーションを肯定的に受け取りにくく、発達に伴って、様々な対人関係上の問題を抱えると言われる。筆者が面接した研究協力者の中にも、自ら想起したアタッチメント対象に対して辛かった出来事を比較的多く想起し、今生じているかのように強い怒りや恐れを表出するなどが見られ、特徴の一部が重なる面がうかがえ、また、客観的な見方が可能な面と人との協調性も可能だが、善し悪しの判断という点に関しては多少脆弱な傾向もうかがえた。

両親が Ds 型 - 愛着軽視型 - の場合、特徴として数井・遠藤によると、恐れ・怒り・失望・傷つき・寂しさなどの強い感情を伴う話や考えを避けることで親から距離を取り、交渉した上で何かを解決するということに端から関心を示さないと言われている[41]。友人関係においては、友人と長く付き合うことができず、本来、潜在的には友人となり得るような人からも自ら離れていきやすいと言われている。本研究でもこのような特徴を示し、一部が重なる面がうかがえた。その場合の自我機能はすべての尺度結果が高位を占め、中でも CP、A、AC が高く権威的で客観的な判断に依拠した形で協調性をとろうとする傾向があった。

父親が Ds 型 - 愛着・軽視型 - で母親が F 型 - 安定・自律型 - が研究協力者に 2 名いて、その場合は、両者とも父親の喪失体験があるもので、自我機能は N 型と逆 N 型で環境要因が影響していることが考えられた。

今日の家族について亀口は、“グローバル化で個人システムの心理的隔壁の強化が中間システムである家族システムが弱体化し、心理的母子家庭とか心理的空家などと表現されているように、家族の機能的なバランスが壊れてきている。また、異なったライフスタイルの追求が奨励されるようになったことも、家族力の低下をもたらした。とも言われる。”[42] という。更に、個人の生き方に対し松井は、“「自分らしさ」を強調しすぎ際限なく「自分探し」をし続けることになり、遂には充実した幸せな人生の姿を描きにくく普通の幸せにたどり着けないということになる”[43] という。この

上記の二者は同一の原因により生じる社会現象と考えられないだろうか。つまり、現代社会において家庭の重要な役割が縮小した結果、家庭がその役割を果たせなくなってきている結果生じたものと考えられる。このことは、家族の危機であり、社会の危機と直接的にリンクする現象を物語っていて、社会問題として取り組むべき重要な課題ではないだろうか。2008 年の文科省の「問題行動調査」報告[44] による暴力行為の発生件数の増加との関連も否定できないと考える。家族という環境の安定においてアタッチメントの安定があり、安定した IWM の形成があるとするならば、このような危機的状況においてこそ Bowlby のアタッチメントに立ち戻る必要があるといえる。

キレそうになった時の抑制の探索にあたり、情動喚起とその制御に関する基本的な経験の上に築かれる IWM のファイルが多様でありキレそうになった時への対応を多面的に抑制することができると考えられるが、このことはキレそうになった時の抑制に限定したものではなく、対人関係における基本として有効なものであると考える。

【結論と限界】

結論：1) 擬似的発散方略は衝動抑制というよりも一種の「キレる」行動化とみなされることが確認できた。また、「キレる」衝動の抑制には、認知的方略のみに集約されるとは限らず、一般的には回避的方略が関係している結論を得た。2) 一般的にみて、「キレる」衝動の抑制と自我機能との間には、批判的親像の傾向より、養護的親像に関する傾向にあり、自我機能がおおらかであると考えられる。3) アタッチメントと「キレる」衝動における方略との関係においては、幼少期に「キレる」体験とその安全の経験を持つことは、成人である今日において「キレる」ような場面で衝動への耐性と抑制（欲求不満耐性と意識的感情調節）がある程度可能であって、幼少期に両親との日常生活において「キレる」体験とその修復、安全の体験などの体験の豊富な蓄積が「キレる」衝動抑制に関係するという結論を得ることができた。

今回の研究は AAI 構造を修正したインタヴューで「無意識を驚かす」ことが特徴であった。若い成人期にある研究協力者にとって、無意識を驚かされたことは、自己の見直しにも意味があったのではないかと考える。

限界：AAI は研究法でもあり、臨床法でもあり技術的な難しさ、我国に普及していないことによる使用上の限界があった。今後の課題として、「アタッチメントとはネガティヴ体験から安心・安定を求める機能であり、しかも、揺りかごから墓場まで生涯に渡る機能である」とした Bowlby の原点に立ち返った場合、高齢者を始め、さまざまな発達段階とライフサイクルにおける対象に対して AAI 構造を基礎とした半構造化面接技法と分析法を行うことによって、アタッチメントの連続性・不連続性について更に探究していく必要がある。

尚、本論文は 2009 年度に提出した修士論文をもとに加筆・修正し、作成した。

【文献】

1）森田　良行 『角川小辞典 7　基礎日本語講座　意味と使い方』 角川書店　1978 年

2）久木山　健一他　現代青少年の「キレる」ということに関する心理学的研究―キレ衝動抑制方略尺度作成の試み―　神戸大学発達科学部研究紀要，第 9 巻第 1 号　9-16　2001 年

3）和田　志麻・加藤　和生 「キレ」の素朴概念の質的分析，九州大学心理学研究，4，177-186　2003 年

4）田中　宏二・東野　真樹　わが国における「キレる」という現象に関する心理学的研究の動向，岡山大学教育学部研究収録，124，79-85　2003 年

5）山崎　晃資 「普通の子」ほど、悩み、傷ついている　子どもの心が分からない！－普通の子がなぜすぐにキレるのか 児童心理　52（8）31－32　1998 年

6）6 長谷川　博一　キレやすい子とキレにくい子はどこが違う，児童心理学，　54(2)，　162-167　2000 年

7）Bowlby，J．（1969）　Attachment and loss：Vol，Attachment. London：　The Hogarth Press.　黒田実郎・大羽葵・岡田洋子訳　　『母子関係の理論 I：愛着行動』 岩崎学術出版社　1976 年

8）安藤　智子・遠藤　利彦 『アタッチメント：生涯にわたる絆』ミネルヴァ書房 144-148　2005 年
9）松尾美佐子 「キレる」衝動抑制に関する研究－アタッチメント概念を用いた若い成人期の半構造化面接による探索　平成 21 年度九州看護福祉大学大学院修士論文　2010 年
10）数井　みゆき・遠藤　利彦〔編著〕『アタッチメント：生涯にわたる絆』ミネルヴァ書房　2009 年
11）W.S. ロールズ＋J.A. シンプソン　遠藤・谷口他監修 『成人のアタッチメント理論・研究・臨床』北大路書房　2008 年
12）久保田　まり 『アタッチメントの研究：内的ワーキング･モデルの形成と発達』川島書店　1995 年
13）大西　美代子　成人愛着研究における発達臨床的意義　思春期青年期精神医学　10（2）　97－114　2000 年
14）数井　みゆき・遠藤　利彦・田中　亜希子・坂上　裕子・菅沼　真樹 日本人母子における愛着の世代間伝達，教育心理学研究，48，323-332　2000 年
15）佐々木　靖子・瀬地山　葉矢・本城　秀次　Adult Attachment　Interview に関する予備的検討―日本の妊婦と青年女子の比較から―　，名古屋大学紀要，50，195-205　2003 年
16）坂上　裕子　心の情意機能（情意機能の発達的変化），　海保　博之・楠見　孝【監修】『心理学総合辞典』，1，379-387，朝倉書店　2006 年
17）遠藤　利彦　語りにおける自己と他者，そして時間―アダルト・アタッチメント・インタビューから逆照射して見る心理学における語りの特質―，心理学評論，49(3)，　470-491　2006 年
18）今井　邦彦　語用論　中島　平三編集 『言語の事典』 109－134　朝倉書店　2005 年
19）片口安史 『新・心理診断法』金子書房　1977 年
20）久木山他　　前掲２）
21）新里・水野・桂・杉田 『交流分析とエゴグラム』株式会社チーム医療　2007 年
22）久保田　まり　前掲　12)
23）詫摩　武俊・戸田　弘二　愛着理論からみた青年の対人態度―成人版愛着スタイル尺度作成の試み―，人文学法，196，1-16　1998 年
24）新里・水野・桂・杉田　前掲　21)
25）今井邦彦　語用論　中島平三編集『言語の辞典』p107 ～ 142 朝倉書店　2005 年
26）松尾美佐子　前掲　9)
27）数井　みゆき・遠藤　利彦 『アタッチメントと臨床領域』ミネルヴァ書房
28）坂上　裕子　前掲　16)
29）坂上　裕子　前掲　16)
30）坂上　裕子　前掲　16)
31）島　義弘　愛着の内的作業モデルに関する一考察―構造と機能に着目して―，心理学評論，50(2)，151-162　2007 年
32）坂上　裕子　前掲　16)
33）佐々木ら　前掲　16)
34）佐々木ら　前掲　16)
35)）佐々木ら　前掲　16)
36）数井ら　前掲　14）
37）数井・遠藤　前掲　10)
38）金政　祐司　青年期の愛着スタイルと感情の調節と感受性ならびに対人ストレスコーピングとの関連，パーソナリティ研究，14(1)，1-16　2005 年
39）尾崎　康子・杉本　宜子　青年期における愛着と攻撃性との関連，富山大学教育学部人間発達科学部紀要，2(1)，37-45　2007 年
40）数井・遠藤　前掲　10）
41）数井・遠藤　前掲　10）
42）亀口　憲治 『家族力の根拠』 ナカニシヤ出版　2004 年
43）松井　洋　現代若者の価値観―モラル崩壊の裏側にあるもの―　丸山久美子 『21 世紀の心の処方学　医学・看護学・心理学からの提言と実践』第 3 部　心の科学が幸福を処方する　233－243　アート　アンド　ブレーン　2008 年
44）西日本新聞　小中高生の暴力　最多　08 年度調査 6 万件，自殺は 136 人　西日本新聞社　2001 年 12 月 1 日

The Journal of Kyushu University
of Nursing and Social Welfare
Vol. 12, No. 1, 103-113 (2011)

ISSN 1344-7505

[Original Article]

A fundamental study on impulse restraint to "go berserk" of young adulthood

—The qualitative search using the semi-structured interview by the attachment concept —

Misako Matsuo[1]　Kazunobu Atsuta[2]

【Abstract】

This study tried a search about controlling the impulse of KIRERU（'going berserk'in modern Japanese ）in the light of 'attachment'qualitatively rather than quantitatively. On the assumption that young adulthood could describe their memories easily and clearly, we carried out the interview with 12 young subjects using the methods developed by KUGIYAMA　and the others. The results were given as follows. Seven of them used the strategies of cognition, avoidance, consultation and emulation together. The subjects who can use the strategies well, had a tendency of having the high-scores of'Free Child''Nurturing Parent'and'Adopted Child'the mid-scores of'Adult'and the low-scores of'Critical Parent'that shows'N-subtypes.'In case the subjects had difficulties for getting a sense of security in their childhood, they had the tendency to use the strategy of consultation. At the semi-structured interview for description of childhood, subjects who had emotional experiences with their parents over wide ranges took this interview livelily. Their attachment patterns showed self-directed types which we call 'homeostatic-attachment-pattern.'On the other hand, the subject seemed to be lack of emotional experiences with their parents had the tendency of taking the strategy of emulation not using someone's helps in emotionally desperate situations. Nevertheless, they might control their tempers since they had alternate sublimating strategies. The semi-structured interviews used in our research were revised by means of installing the methods developed by MAIN＆GOLDWYN which could be used not only for the research method but also for clinical supports and assessments.

Key words **: attachment concept, KIRERU(go berserk) , internal working model (IWM), semi-structured interview**

[1] Dept. of Nursing, Kyushu university of Nursing & Social welfare,　[2] Dept. of Social welfare, Kyushu university of Nursing & Social welfare